

本学学生の生活実態調査 IV

— 余暇活動に関して —

Fact-finding Research into Our Junior College Students on Daily Life IV

坪田雄二 田中美季 松原勝敏
山口修司 湯川秀樹

総務庁「社会生活基本調査」によれば、昭和51年に比べ、平成3年には、個人が自由に使える時間は各年齢層において増加していることが示されている。また、価値観の多様化にともなって、職場を中心とした個人の生活スタイルが徐々に崩れ始めており、人々が充実感を感じる状況も、家族と一緒にいる時、仕事に打ち込んでいる時といったものから、休養している時、友人、知人と一緒にいる時、趣味・スポーツの時など多元化の傾向がみられる（国民生活に関する世論調査、総理府）。そして、自己開発的余暇が充実している人ほど生活全体の充実感が高いとの報告もある（(財)余暇開発センター「企業のゆとり度の変化と人々の生活充実感」, 1993）。これらのことを考えあわせてみると、余暇活動は、単に仕事の疲れを癒したり、鋭気を養うといった意味から、積極的に自己実現を図る場に変化しつつあることがうかがえる。このような変化は、国民生活白書（1993）で次のように述べられていることからわかるであろう。「現行の経済計画である、『生活大国5カ年計画—地球社会との共存をめざして—』においても、労働時間の短縮は生活大国の実現にとっても最重要課題の一つとして位置づけられ、平成8年度までに年間総労働時間1800時間を達成することを目標としている。また、同計画では、労働時間の短縮等により生じた自由時間を充実したものとするための環境整備のための施策を推進することとし、生涯学習の推進、文化の振興、長期余暇化に対応した公共施設などの整備の促進、余暇活動における混雑の緩和、多様な余暇活動に対応した施設整備、情報提供などを図ることとされている。」

以上のように、余暇活動はこれからの社会において、より充実を図るべき重要な課題となっている。なお、余暇活動とは、学生の場合は「授業等の学生として拘束される時間以外の時間に個人の自由裁量で行われる活動」と定義する。そこで、本研究では現在どのような余暇活動を行っているのか、将来どのような余暇活動を希望しているのか、余暇活動における現実と希望のギャップ、に関して調査を行った。そして、余暇活動には、時間的情況、経済的情況、友人環境、環境条件あるいは人生観、生活時間感覚、価値観などさまざまなものが関連していると思われるが、それらの中から、各個人の生活価値観意識を取り上げ、これが前述の余暇活動の現状とどのよう

に関連しているのかについての資料を得ることも目的とした。

方 法

被調査者 研究 I 参照。

調査時間 研究 I 参照。

調査手続 研究 I 参照。

調査項目

〈余暇活動〉 余暇活動として、短大生の余暇活動を検討した飯田（1991）を参考にし、その調査から、スポーツ部門からボーリング、テニス、スキーの3つ、趣味・創作部門から料理（趣味的）、スポーツ観戦（テレビを除く）、映画鑑賞（劇場で）、音楽鑑賞（CD、テープで）の4つ、観光娯楽部門からドライブ、旅行の2つ、その他の部門から新聞・雑誌を読む、読書（小説など）、テレビを見る、ごろ寝の4つ、以上計13の余暇活動を取り上げた。その13の活動について、現実の余暇活動については、日頃どのくらいそれぞれの活動を行っているかを5段階で（よく行う（5）－まったく行わない（1））、将来の希望については、将来どのくらい行いたいと思うかを5段階（非常にやりたいと思う（5）－まったく行いたいとは思わない（1））で評定させた。

〈生活価値観意識〉 生活価値観意識に関しては、大学生の価値観を調査した田口・富永・北村（1993）の調査を参考にし、項目を選択した。田口ら（1993）は、生活価値観意識を、一般的価値意識と若者世代意識に大別しており、前者は6因子、17項目から、後者は5因子、19項目からなることを示している。本研究では、一般的価値意識については、1因子の項目を3項目以下として6因子15項目を、若者世代意識については各因子3項目の5因子15項目を選択して実施した。評定方法は、それぞれの項目（詳細は表2、表3を参照）について、自分に、あるいは自分の考えに、あてはまるかどうかについて5段階（あてはまる（そう思う）（5）－あてはまらない（そう思わない）（1））で回答させた。

結果および考察

〈余暇活動に関する分析〉

まず最初に、それぞれの余暇活動を現在どの程度行っているのかについて知るために、各項目ごとに平均値を算出した（数値が高いほどよく行われていることを示す）。なお、項目ごとの被調査者数は、それぞれにおいて無効回答の数が異なるため同数にはなっていない（対象者数753～777名）。図1は、それぞれの余暇活動が行われている程度を、各部門ごとに高い順にあげてある。すべての部門を通じて最も頻度の高いものは、「テレビを見る」であり、次いで「音楽鑑賞」

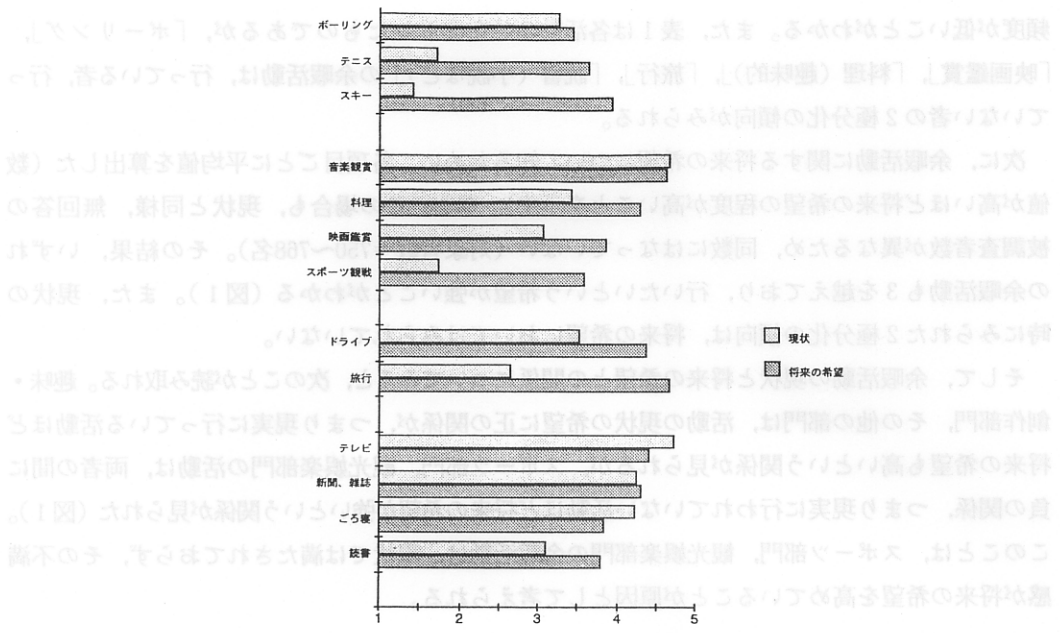


図1 余暇活動の現状と将来の希望

「新聞・雑誌を読む」が続いている。また、ほとんど行われていない余暇活動としては、「スキー」、「テニス」、「スポーツ観戦」、「旅行」などがあげられる。また、部門ごとでは、スポーツ部門の

表1 余暇活動の現状の分布

	ま っ た な く い	あ わ ま な り い	ど ち え ら な も い	と き ど き う	よ く 行 う
ボーリング(2)	5.9	26.9	7.3	54.6	5.3
テニス(12)	59.2	23.5	5.5	11.1	0.8
スキー(26)	75.0	16.1	3.2	4.8	0.9
音楽鑑賞(3)	0.8	2.7	2.2	17.8	76.5
料理(10)	9.1	20.0	10.3	42.3	18.3
映画鑑賞(14)	13.7	26.4	8.2	44.3	7.3
スポーツ観戦(17)	59.4	22.6	5.4	9.4	3.1
ドライブ(9)	11.7	15.6	9.9	34.7	28.2
旅行(19)	17.9	37.0	13.8	25.8	5.5
テレビ(5)	0.4	3.2	2.7	11.8	81.9
新聞・雑誌(5)	1.0	5.7	8.3	37.6	47.4
ごろ寝(5)	2.1	7.8	9.3	26.9	54.0
読書(9)	15.8	24.8	11.4	29.1	18.8

表中の数値は%。()内の数値は無回答者数。

頻度が低いことがわかる。また、表1は各活動の分布を示したものであるが、「ボーリング」、「映画鑑賞」、「料理（趣味的）」、「旅行」、「読書（小説など）」の余暇活動は、行っている者、行っていない者の2極分化の傾向がみられる。

次に、余暇活動に関する将来の希望について知るために、各項目ごとに平均値を算出した（数値が高いほど将来の希望の程度が高いことを示す）。なお、この場合も、現状と同様、無回答の被調査者数が異なるため、同数にはなっていない（対象者数=750~768名）。その結果、いずれの余暇活動も3を越えており、行いたいという希望が強いことがわかる（図1）。また、現状の時にみられた2極分化の傾向は、将来の希望においてはみられていない。

そして、余暇活動の現状と将来の希望との関係についてみると、次のことが読み取れる。趣味・創作部門、その他の部門は、活動の現状の希望に正の関係が、つまり現実に行っている活動ほど将来の希望も高いという関係が見られるが、スポーツ部門、観光娯楽部門の活動は、両者の間に負の関係、つまり現実に行われていない活動ほど将来の希望が強いという関係が見られた（図1）。このことは、スポーツ部門、観光娯楽部門の余暇活動は、現状では満たされておらず、その不満感が将来の希望を高めていることが原因として考えられる。

<生活価値観意識に関する分析>

本研究で用いた一般的価値意識と若者世代意識それぞれについて、各項目の構造を検討するため、因子分析を実施した。分析の対象は、それぞれの意識の項目すべてに回答している調査対象としたため、766名、757名となった。そして、それぞれの意識に関して、主因子法、バリマックス解による因子分析を行った。項目の単純構造や因子の解釈可能性を考慮していずれの意識においても5因子解を採用した。その結果は、表2、表3に示してある。

一般的価値意識については、第1因子は「出世より自分の人生をエンジョイする生活を送りたい」、「仕事や勉強で認められなくてもレジャーや趣味で尊敬されればよい」という2項目が高負荷を示しており、「享楽主義」の因子と、第2因子は「パーティーなどで初対面の人と話すのは苦手だ」、「リーダーになって苦労するより、人に従っているほうが気楽でよい」、「小さな頃からおやまの大将になるのが好きなほうだった」、「少し無理だと思われるくらいの目標を立てて頑張るほうだ」という4項目が高負荷を示しており、「積極性」の因子と（最初の2項目は逆転させて得点化）、第3因子は「あまり収入はよくなくても、やりがいのある仕事をしたい」、「経済的に恵まれなくても、楽しく暮らせればよい」、「古いものは長い間受け継がれてきた良さがあるから、なるべく残すべきだ」、「配偶者以外でも本当に愛し合える異性がいたら性的交渉をもってよい」という4項目が高負荷を示しており、「保守」の因子と（4番目の項目は逆転させて得点化）、第4因子は「自分のことを考える前に他人のことを考えるほうだ」、「友達とうまくやるためには、自分の気持ちを抑えるほうだ」という2項目が高負荷を示しており、「配慮」の因子と、第5因子は「自分の欲望にできるだけ忠実に生きるのが、本当の生き方だと思う」、「結婚しても必ずしも子供を生む必要はない」、「頑張って出世してから、本当に自分のやりたいことができると思う」という3項目が高負荷を示しており、「自立性」の因子と命名した。

表2 一般的価値意識の因子分析結果

	享主 楽義	積 極 性	保 守	配 慮	自 立 性
出世よりは、自分の人生をエンジョイする生活を送りたい	.758	.043	.089	.058	-.001
仕事や勉強で認められなくてもレジャーや趣味で尊敬されればいい	.660	-.049	.124	.058	.204
パーティーなどで初対面の人と話すのは苦手だ	-.093	.690	.252	-.150	.054
リーダーになって苦勞するより、人に従っているほうが気楽でよい	.161	.666	-.197	.121	.174
小さな頃からおやまの大将になるのが好きなほうだった	.090	-.534	.009	-.138	.201
少し無理だと思われるくらいの目標を立てて頑張るほうだ	-.189	-.384	.251	.333	.351
あまり収入はよくなくても、やりがいのある仕事をしたい	.172	-.110	.705	-.048	.023
経済的に恵まれなくても、楽しく暮らせればよい	.455	.051	.609	-.000	.042
古いものは、長い間受け継がれてきた良さがあるからなるべく残すべきだ	-.042	.032	.480	.224	-.032
配偶者以外でも、本当に愛し合える異性がいたら性的交渉をもってよい	.336	-.134	-.414	.064	.385
自分のことを考える前に他人のことを考えるほうだ	.069	-.101	.100	.749	-.015
友達とうまくやるためには、自分の気持ちを抑えるほうだ	.059	.352	-.024	.677	-.063
自分の欲望にできるだけ忠実に生きるのが、本当の生き方だと思う	.218	-.111	.023	.002	.612
結婚しても必ずしも子供を生む必要はない	.033	.225	-.132	.260	.578
頑張って出世してから、本当に自分のやりたいことができると思う	-.444	-.031	.130	.270	.501

n=766

若者世代意識に関しては、第1因子は「他の人と違う個性的な生き方をしたい」、「皆と同じような生活をするのはつまらない」、「早い機会にひとかどの人物になりたい」という3項目が高負荷を示しており、「個性重視」の因子と、第2因子は「自分を表現する手段としてファッションを重視する」、「ファッションのために金や時間をかけても惜しくない」、「皆が認めるブランド品を身につけていないと不安だ」という3項目が高負荷を示しており、「ファッション志向」の因子と、第3因子は「疲れた神経をスポーツでスカットさせたい」、「好きでよくするスポーツや趣味をもちたい」、「スポーツで丈夫な身体づくりに励みたい」という3項目が高負荷を示しており、「スポーツ志向」の因子と、第4因子は「昇進出世のためなら努力を惜しまない」、「同じ一生ならば苦勞しても成功者になりたい」、「今の世の中、努力すれば出世できる」、「グループの中で注目的になりたい」という4項目が高負荷を示しており、「上昇志向」の因子と命名した。なお、第5因子については、「食べるものには凝りたい」、「今の世の中、知恵を働かせれば成功できる」という2項目が高負荷していたが、これらの項目の背後にある因子を想定できないため、命名せず分析の対象から除くこととした。なお、以上の構造は、田口ら（1993）の研究の結果で見られた項目と因子の関係と若干異なっていたが、想定される因子としてはほぼ同じものが認められていた。

表3 若者世代意識の因子分析結果

	個性重視	ファッション志向	スポーツ志向	上昇志向	
他の人と違う個性的な生き方をしたい	.797	.061	.137	.018	.002
皆と同じような生活をするのはつまらない	.765	.050	.128	-.009	-.031
早い機会にひとかどの人物になりたい	.612	.103	-.032	.218	.164
自分を表現する手段としてファッションを重視する	.160	.803	.094	.116	.070
ファッションのために金や時間をかけても惜しくない	.085	.741	.107	-.105	.035
皆が認めるブランド品を身につけていないと不安だ	-.064	.686	-.199	.060	.094
疲れた神経をスポーツでスカッとさせたい	.057	.000	.804	.182	.016
好きでよくするスポーツや趣味をもちたい	.196	.068	.724	-.045	-.083
スポーツで丈夫な身体づくりに励みたい	-.035	-.048	.693	.285	.255
昇進出世するためなら努力を惜しまない	.000	.043	.128	.773	.164
同じ一生ならば苦勞しても成功者になりたい	.269	.012	.141	.710	-.190
今の世の中、努力すれば出世できる	-.135	-.097	.094	.527	.454
グループの中で注目的になりたい	.294	.418	.088	.482	-.050
食べるものには凝りたい	.004	.238	.176	-.096	.716
今の世の中、知恵を働かせれば成功できる	.360	.003	-.153	.177	.564

n=757

<余暇活動の現状と生活価値観意識との関連性の検討>

ここでは、余暇活動の現状と各個人の価値観との関連性を検討した。まず最初に、一般的価値意識と余暇活動の関連性についてみてみよう。両者の関連性を検討するため、すべての項目について回答している被調査者を分析対象としたため、730名が対象となった。そして、一般的価値意識の5因子それぞれの得点を、得点が高いほど各因子の特徴を強く表す方向に得点化して求めた。また、余暇活動の現状については、13の余暇活動それぞれの平均値を算出すると共に、各部門ごとの得点も算出した。そして、5つの因子の得点と余暇活動の得点の相関係数を求めた。それが、表4である。スポーツ部門の活動は、“積極性”の因子と関連がみられ、積極的な者ほど

表4 一般的価値意識と余暇活動との関連性

	一般的価値意識				
	享楽主義	積極性	保守	配慮	自立性
＜余暇活動の内容＞					
ボウリング	.023	.108*	.057	.128*	-.017
テニス	-.014	.087*	-.002	.011	.064
スキー	.044	.165*	-.039	-.030	-.000
スポーツ部門	.026	.184*	.014	.068	.025
音楽鑑賞	.043	.028	-.018	.104*	.001
料理	.005	.187*	.041	.091*	.010
映画鑑賞	.069	.122*	.024	.022	.041
スポーツ観戦	-.018	.095*	-.021	.032	.064
趣味創作部門	.042	.203*	.018	.100*	.055
ドライブ	.155*	.246*	-.052	.089*	-.004
旅行	.187	.151*	.038	.016	.072*
観光娯楽部門	.210*	.250*	-.021	.068*	.039
テレビ	-.037	.066	.057	.057	.001
新聞・雑誌	-.073*	.014	-.028	.046	.027
ごろ寝	-.005	.045	-.046	.066	.022
読書	-.079*	.011	.045	.032	-.014
その他の部門	-.088*	.028	.013	.084*	.013

表中の数値は相関係数。n=730 *p<.05

スポーツ活動に従事していることがわかる。趣味・創作活動では、“積極性”，“配慮”の因子と関連がみられ、積極性の強い者は、映画鑑賞，スポーツ観戦，料理などの活動に多く従事し、配慮の強い者は音楽鑑賞，料理に従事する傾向にあることがわかる。観光娯楽の活動は，“享楽主義”，“積極性”，“配慮”の因子と関連がみられ、これらの傾向の強い者ほど、ドライブをしたり、旅行にいったりといった活動をしがちであること、その他の部門については、新聞・雑誌を読んだり、読書をしたりといった活動は、享楽主義傾向の弱い者が多く行うことが示された。

次に、若者世代意識と余暇活動の関連についてみよう。両者の関連も一般的価値意識と同様、それぞれの得点が高いほど、当該の傾向が強い、あるいは当該の活動を多く行う方向に得点化して平均値を算出した。そして、両者間の相関係数をまとめたものが、表5である。スポーツ活動については、“個性重視”，“スポーツ志向”，“上昇志向”の因子と関連がみられ、スポーツ志

表5 若者世代意識と余暇活動との関連性

	若者世代意識			
	個性重視	ファッション志向	スポーツ志向	上昇志向
＜余暇活動の内容＞				
ボーリング	.050	.033	.189*	-.105*
テニス	.030	-.040	.115*	-.008
スキー	.084*	.028	.077*	-.035
スポーツ部門	.084*	.010	.208*	-.082*
音楽鑑賞	-.055	.045	-.036	.050
料理	.037	.028	.014	.090*
映画鑑賞	.029	.087*	.026	.012
スポーツ観戦	.084*	.068	.120*	.041
趣味創作部門	.054	.100*	.062	.083*
ドライブ	.006	.144*	.070*	.057
旅行	-.003	.093*	.066	.019
観光娯楽部門	.002	.149*	.085*	.049
テレビ	-.118*	.032	.016	.061
新聞・雑誌	.060	.093*	.009	.072
ごろ寝	.024	.059	-.023	-.026
読書	.071	-.155*	-.055	-.041
その他の部門	.040	-.019	-.034	.010

表中の数値は相関係数。 $n=720$ * $p<.05$

向の強い者ほどスポーツ活動に従事しており、個性重視の傾向の強い者はスキーに行く傾向が強く、上昇志向の強い者はボーリングを行うことが示された。趣味・創作の活動は、「ファッション志向」の因子と関連がみられ、ファッション志向の強い者ほど映画をよく見に行き、上昇志向の強い者は料理を趣味的に行うことが多いことがわかる。また、観光娯楽の活動は、「ファッション志向」、「スポーツ志向」の因子と関連がみられ、これらの傾向の強い者ほどドライブによく行くことがうかがえる。その他の活動については、テレビを見るという活動は、個性重視の傾向の弱い者ほど多く行い、新聞・雑誌を読むのは、ファッション志向の強い者、そして、読書を多くするのは、ファッション志向の弱い者であることが示された。

以上の結果をまとめてみると、当たり前のことではあるが、積極性の高い者ほど多くの余暇活動に従事しており、関連性のみられない活動は、「音楽鑑賞（CD、テープで）」、「新聞・雑誌を

読む」、「読書（小説など）」、「テレビを見る」、「ごろ寝」であり、これらはいずれも屋内の余暇活動である。これらのことから、自分の価値観に従って、余暇活動に従事している実態がうかがえる。また、ファッション志向の強い者ほど、新聞・雑誌は読むが、読書をあまり行わないという結果がみられた。これは、新聞と雑誌を同じカテゴリーで回答を求めたため、どちらを被調査者が想定したかは本研究の結果からはわからないが、おそらく読書をあまりしないという結果を考えてみると、雑誌を想定して回答したのではないだろうか。そう考えると、マンガ、雑誌などには目を通すが、小説などは読まないという現状は、ファッション志向の価値観と関連があり、読書イコールださい、かっこよくないというイメージが原因であることがうかがえる。ただし、この解釈はあくまでも推論であり、これが妥当なものかどうかは今後の検討課題であろう。

引用文献

- 飯田朝子 1991 本学学生の余暇活動の実態—家政科在学生の場合一 大妻女子大学紀要—家政系—, 27, 103-121.
- 経済企画庁(編) 1993 国民生活白書 豊かな交流—人と人のふれあいの再発見 大蔵省印刷局.
- 総務庁 1991 社会生活基本調査.
- 総理府 1993 国民生活に関する世論調査.
- 田口節芳・富永徳幸・北村靖治 1993 大学生の余暇と生活意識 広島体育学研究, 19, 1-14.
- 余暇開発センター 1993 企業のゆとり度の変化と人々の生活充実感.

高松短期大学研究紀要

第 24 号

平成6年1月31日 印刷
平成6年1月31日 発行

編集発行 高松短期大学
〒761-01 高松市春日町960番地
TEL(0878)41-3255
FAX(0878)41-3064

印刷 高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地